チャウシェスク政権前期における正教会と歴史遺産政策

ルーマニアにおけるポスト社会主義の文化遺産政策と世界遺産の役割に関する研究 - 1

ORTHODOX CHURCH AND HERITAGE POLICY IN EARLY CEAUȘESCU PERIOD

A study on heritage management and role of World Heritage in post-socialist Romania - 1

舘崎 麻衣子^{*1}, 花里 利一^{*2}, 三宅 理一^{*3}

Maiko TATEZAKI, Toshikazu HANAZATO and Riichi MIYAKE

Analysing the transformation from socialist to post-socialist heritage policy in Romania from 1960's to 1990's, this paper focuses on the policy-making and implementation processes in the early Ceaușescu period in term of Orthodox religious heritage from the following points.

1. Formation of socialist heritage policy till 1970's in relation with the ideological cultural campaign over the Romanian Orthodox Church.
2. Priority of certain medieval Orthodox monasteries as representative Romanian heritages and their restoration led by Ioana Grigorescu
3. Implementation of systematization policy for promoting urbanization, which caused serious crisis of the historical cities in Romania

Keywords: *Socialist Authority, Heritage Policy, Romania, Systematization, Orthodox Church, Ioana Grigorescu*

社会主義政権, 遺産政策, ルーマニア, 国土体系化, 正教会, イオアナ・グリゴレスク

1. 目的・方法

1.1. 背景

1989年に連鎖的に引き起こされた東欧の社会主義国家の崩壊は、政治経済面だけでなく文化の枠組みにも決定的な変化を及ぼした。その最後に位置づけられる同年12月のルーマニア革命は、自主独立の社会主義路線にともなって強化されたプロパガンダ的文化政策の破綻をもたらすが、建築遺産の領域においても根本的な変化を余儀なくされた。それまでのイデオロギー重視の「社会主義的」な遺産行政が抜本的に改編され、ユネスコ世界遺産等を軸として国際社会との連携をはかる新たな政策が導入される。こうした脱社会主義化のプロセスはこの国の地域文化の基層を形成するルーマニア正教会の復権を促し、教会が本格的に遺産保護に乗り出す契機ともなった。本研究は、第二次大戦後に始まった社会主義時代とりわけ1965年以降のチャウシェスク政権期と1990年以降の脱社会主義期を比較検討し、正教会の関与の仕方と遺産保護体制の転換について考察を重ねるとともに、ユネスコ世界遺産政策が及ぼしたインパクトについて精査し、「チャウシェスク政権前期における遺産政策」、「チャウシェスク政権後期における宗教施設の破壊」、「ルーマニア革命と世界遺産政策の導入」、「修道院保存修復事業の実施事例」の4編に分けて論を展開するものである。

1.2. 本論文の目的

1977年のヴランチャ地震を境として、ルーマニアの遺産政策が大きく転換するが、本論文ではそれ以前の「チャウシェスク政権前期」を対象とする。社会主義政権によって確立されたイデオロギー先行

的な文化政策と歴史遺産保護の關係に着目し、国民の間で共有されてきた正教会の資産がこの時期にどのようなかたちで解体／継承／変質のプロセスを辿ったかを明らかにする。比較的反バラルな専門家集団（建築家、考古学者、美術史家、修復家）を擁する文化遺産当局の政権内での位置づけ、修道院や教会等の正教会の歴史的資産に対する政権の介入を当時の文書、残された図面などより、ヴランチャ地震以前の歴史遺産政策の特質を洗い出す。

1.3. 先行研究

2000年代以降、EUの枠組みの中で東欧の社会主義時代の評価をめぐる議論が活発化し、仏、英、蘭等で共同研究・国際会議が繰り返し実施される。チャウシェスク期の都市政策については、イラリオン・ツイウ（注32）、リリアナ・イェガらの研究成果（参考文献6）が公開される。論点としては、その時代を象徴する国土体系化（*sistemizarea*）政策について、事例研究を踏まえた実態把握、行政手続き、農村部の疲弊化などが中心となるが、歴史都市遺産に着目した研究はブカレストを除いて見当たらない。

チャウシェスク期の歴史遺産問題については、アーカイブ化が進んでおらず、研究も未着手である。

他方、日本においては、1990年代に行われたユネスコ日本信託基金による同国の世界遺産保存修復事業を契機として学術交流が進み、修復建築家イオアナ・グリゴレスクの展覧会が研究者らの主導で日本建築学会にて実施された^{注1)}。その折に編纂されたモルドヴァの中世遺産に関する研究（参考文献5）に研究者を含む日本・ルーマニアの研究成果が収録されたが、1960年代のルーマニアの歴史遺産政

^{*1} (株)文化財保存計画協会 主任研究員・修士(工学)
(三重大学大学院工学研究科 大学院生)

^{*2} 三重大学大学院工学研究科 教授・工博

^{*3} 東京理科大学理工学部 客員教授・工博

Senior Researcher, Japan Cultural Heritage Consultancy, M.Eng.
(Grad. Student, Graduate School of Engineering, Mie University)
Prof., Graduate School of Engineering, Mie University, Dr.Eng.
Visiting Prof., Tokyo University of Science, Dr.Eng.

策に関する研究は含まれていない。

1.4. 方法

本論文の方法は、先行研究の整理を下敷きとして、以下の2点に集約される。

- (1) 当時の公文書は閲覧することができないが、歴史記念物局より刊行された『歴史的記念物紀要』(Buletinul Monumentelor Istorice)をもとに当時の歴史遺産事業に関する詳細な情報を収集し、ヴランチャ地震以前の遺産政策を分析する。
- (2) 関係者へのヒヤリング調査。ルーマニアの歴史遺産政策に携わった専門家、官庁関係者、教会関係者等にヒヤリング。特に、遺産政策上の重点地域であったスチャヴァ県における事業については、同地で多くの事業を手掛けたイオアナ・グリゴレスク本人より生前に提供された図面資料を分析する。

2. 社会主義政権における文化遺産政策

2.1. 社会主義体制下における文化政策

第二次大戦後のルーマニアは、1947年に王政を廃止してルーマニア人民共和国を建国し、ソビエト連邦の強い影響下に社会主義体制を確立していく。ルーマニアの共産党政権の特徴は、ゲオルギューデジによる権力の掌握期から常にソ連との距離の取り方が意識され、特にスターリン死去後になって民族独立路線が顕著となった点であろう。1965年以降のチャウシェスク政権はその傾向がさらに強まる。

社会主義国家における文化行政は、党のプロパガンダを目的としてイデオロギー支配を強める方向に動くのが一般的であるが、伝統的に土着性が高く民族感情の強いルーマニアにおいては他の東欧諸国とは異なった力が働いている。本来、政権が発動した企業国有化、農村の集団化、重工業化といった強権的で中央集権的な施策を徹底させるべく、国民意識を「社会主義文化」に向かって鼓舞扇動するものでなければならないが、国民の間で根強いキリスト教的な社会規範や信仰心、あるいは伝統的な反露(ソ)感情との対決を回避し、逆にそれらを巧みに取り込んだ政策運営に腐心したことに着目したい。とりわけ人々の日常生活に深く浸透し圧倒的な影響力をもつルーマニア正教会に対しては貽と鞭を使い分けて適度の妥協をはかりつつ、その資産を利用することでルーマニア固有の歴史性を担保することになる^{注2)}。正教会に対して徹底的な弾圧で臨んだソ連の宗教政策とはその点で大きく異なっていた。

社会主義政権の特徴は、共産党一党独裁ゆえの党の国家機関に対する優位性が明確に表れている点にある。すなわち、党の常務委員会が、国会に相当する国民大議会(Marea Adunare Nationala)によって任命された閣僚会議(Consiliul de Miniștri)の上に立つ。文化政策の担当省庁としては、当初は王政時代の組織を引きずって文化省(Ministerul Culturii)が置かれていたが、何度かの改組を経た後^{注3)}、チャウシェスク政権下で、党と閣僚会議の双方に従属する社会主義文化教育常務委員会(Consiliul Culturii și Educației Socialiste)^{注4)}が統括することになった^{注5)}。

ルーマニアの文化政策が統合化かつ強権化されるのは、1971年、党書記長のチャウシェスクが中国と北朝鮮を訪問し、文化大革命や個人崇拜に強い刺激を受けたことが直接のきっかけといわれる。この年に設置された社会主義文化教育常務委員会は、従来の文化領域に歴史遺産(文化財保護)を取り込み、さらに教育部門と合体させ

ることで、絶大な権限が与えられた。社会主義的な「新しい人間」^{注6)}の育成と環境づくりを究極の目標として、従来のプロパガンダを越える総合的な文化行政を専横的に行うことが可能となった。奇妙なまでに理想化された「ホモ・ソヴィエティクス」^{注7)}が社会を支配するという、教条主義と誇大妄想の入り混じった言説がこの国の文化の仕組みを動かすようになったのである。

2.2. 歴史遺産政策の変化

ルーマニアの歴史遺産をめぐる政策は19世紀の後半以降、フランス型のモデルを追求し、教会建築や宮殿などの領域でそれなりの研究と修復実績を残している。なかでも第一次大戦後の戦間期においては、ロシアに組み入れられていたベッサラビア等の領土が回復したこともあって、過去のルーマニアの栄光を讃える大ルーマニア主義が台頭し、積極的な歴史遺産修復事業が展開された。その任を負ったのが1860年に設置された歴史的記念物委員会(Comisia Monumentelor Istorice)であり、ヴィオレ＝ル＝デュク式の中世建築研究を範として着実な成果を重ねていた。シュテファン・バルシュ^{注8)}に代表されるすぐれた修復建築家を擁し、設計・施工において遜色のない仕事を見せている。

人民共和国成立にともない、歴史的記念物委員会は1948年になって廃止の憂き目にあう。文化財保護の任は暫定的にアカデミーの中に設けられた文化課(Departamentul Cultelor)が受け持つが、その主たる任務は博物館の維持にすぎなかった。従来行われていた教会建築や宮殿の保護が王党派の残滓としての扱いを受け、加えて集合住宅の建設が喫緊の課題となったことで、建築遺産の保護は実質的に無視される^{注9)}。しかし、スターリン批判が巻き起こるとともに、歴史遺産に対しても柔軟な姿勢が見え始め、1955年には、博物館の機能を強化し歴史遺産の保護活用を進めるべく、文化財保護修復活用法(Regulamentul privind protejarea, restaurarea și folosirea monumentelor de cultură)が制定される。党中央においても、社会主義化という前提をつけつつ、歴史文化の取り込みが論議されるようになり、1957年の党政治局において採択された「労働者階級のための愛国教育の改善に向けた計画」が将来の方向を決定づけた^{注10)}。その結果が、1959年の歴史的記念物局(Direcție a Monumentelor Istorice=DMI)の設置である。文化政策とは切り離し、建設省にあたる建設・建築・国土体系化国家委員会(Comitetului de Stat pentru Construcții, Arhitectura și Sistematizare=CSCAS)の中に組み入れることで、国土計画の一環として歴史遺産の保護が位置付けられ、10年余りを経て、かつての歴史的記念物委員会の機能が復活したわけである。

2.3. チャウシェスク政権における文化遺産政策の転換

1965年に急死したゲオルギューデジの後を継いだチャウシェスクは、当初、穏健な社会主義路線を継承し、民族性にこだわった政治文化を前面に押し出した。その旗振り役となったのが、同年に文化芸術国家委員会委員長(文化大臣に相当)に就いた建築家ボンボリウ・マコヴェイ^{注11)}で、映画演劇や造形美術の領域で積極的な振興策を打ち出すことになる。西欧のヌーヴェル・ヴァーグに対応すべく、ルーマニアのアイデンティティを基軸とした斬新な映像表現は国際的にも注目される^{注12)}。しかし、民族独立路線の強化がインフラ計画や建設プログラムに及ぶに到って、イデオロギーを極端に打ち出した過激な国土計画(国土体系化)が上位計画となり、大衆

扇動的な「文化の家」プログラムや「社会主義的」な遺産活用計画が優先される。旧弊に囚われず社会主義を標榜してやまない「新しい人間」を想定した歴史街区の再編が次々と実施に移され、従来の意味における遺産保護とは異なった恣意的な歴史の解釈と流用が目立つようになった。

1971年に発足した社会主義文化教育常務委員会は、文化政策と歴史遺産政策を合体させ、加えて教育をも統括する。本来は経験主義的な下地の上に成り立っていた歴史遺産保護がイデオロギー重視の歴史遺産の活用にシフトしたといってもよい。その考え方を全面的に打ち出したのが1974年の第11回党大会で、それを機にルーマニアの「国土体系化」は立法化され、自治体に後に述べるような都市・農村の体系化計画の策定を義務付ける。文化遺産保護を担う部局もそのサイクルに編入され、社会主義文化教育常務委員会の下に文化遺産局(Direcția Patrimoniului Cultural Național)として組み入れられた。

2.4. 正教会の役割

ルーマニア正教会は、何度も解体の危機に見舞われながらも最終的には社会主義政権と共存しえた点で、ソ連におけるロシア正教会とは大きく異なった道を歩んだ。共産党は宗教を敵対視しつつも、その社会生活への影響力を政治的に利用することを考へ、懐柔と弾圧の双方を繰り返す。人民共和国の発足にともない1948年には宗教法を改正し、その後の10年は王党派に近いとされた正教会を徹底的に締め付け、教会組織の根本からの再編を目論む。教会への監視を強化し、教会会議(シノド)や人事に直接的に介入し、民主ブロックに与する司祭を宗教大臣に取り立てることもあれば^{注13)}、正教会最高位の総主教に任命することもあった^{注14)}。また、密かに司祭や修道士を秘密警察のエージェントとなしたケースも多々報告されている^{注15)}。反抗的な司祭や修道士・修道女の投獄、教会財産の没収、神学校の閉鎖が相次ぎ、特に1950年代の終わりには教会や修道院の閉鎖や取り壊しが100件近くに及んだ^{注16)}。チャウシェスクが政権トップに就く頃には、正教会の力は徹底的に削ぎ落とされ、党に対して従順で協力的な人心掌握機関へと姿を変えていた^{注17)}。その代償として国の財政支援を受ける「国家教会」の地位は保証され、聖職者の給与も戦前と同様、国(宗教課)が賄っていた。

1965年に始まるチャウシェスク政権は、こうした正教会に対してむしろ宥和的な態度を取るようになる。ルーマニア史における正教会の役割を「正教会は人民の信仰心の統一を保ち、人民の生活の基本を守り、国民的統合の達成に寄与した」^{注18)}として評価し、国家のアイデンティティづくりにおける正教会の参与を積極的に促した。その見解を視覚化するのが、歴史性の高い建築遺産であり、特に中世から近世にかけての修道院や教会は城塞や宮殿と並んで意図的に記念物化された。芸術性が高く建築物として傑出した価値をもつとされたヴォロネッツ、スチェヴィツァ、プトナ、クルタ・デ・アルジェシュ等の修道院がその代表格である^{注19)}。ただ、その位置づけは、フレスコ画で名高いヴォロネッツに示されるように、修道院復興ではなく、観光拠点としての整備をともなった脱宗教的な扱いとなっていた点に注意したい。

2.5. 修道院の修復

1959年に歴史的記念物局(DMI)が発足し、それまで宗教課の下で細々と続いていた宗教建築の維持修理を本格的な保存修復とし

て施策の練り直しを図り、緊急調査を踏まえた事業化に乗り出す。

今回の文献調査において、歴史的記念物局が刊行した『紀要』が入手できた。公文書が未整理の現段階においては、事業費の配分を示す唯一の史料である。これを表にとりまとめ(Table 1)、さらに地図上に当時の県別に事業費をプロットしたものがfig.1である。

1960年代の遺産保護事業総数が継続中のものを含め95件を数え、そのうちルーマニア正教会の案件は59件に及ぶ^{注20)}。全事業のうち実に2/3が正教会の建造物で占められている。事業費規模で見ると、10年間の総事業費155,789,554レイのうち41.7%が正教会の資産に振り向けられた^{注21)}。カトリック、プロテスタントにイスラームのモスクを加えた宗教建築全体では半数の55.3%となる。

この一覧表から読み取れるのは、当時のルーマニアの全39県およびブカレスト特別市の中で、北西部モルドヴァ地方のスチャヴァ県とトランシルヴァニア地方のブラショフ県、ワラキア地方のコンスタンツァが突出して予算規模が大きい点である(Fig.1, Table 1)。それぞれ、15件の案件に24,515,484レイ(総事業費の15.7%)、5件に対し19,803,068レイ(12.7%)、5件に対し16,141,012レイ(10.4%)が投入されている^{注22)}。中世モルドヴァ公国の都スチャヴァを擁するスチャヴァ県は中世の正教修道院を多数抱え、住民の信仰心も篤いとされる。修復案件も大半が正教会の施設である。一方、ハンガリー系住民とドイツ系住民が多いトランシルヴァニアのブラショフ県では福音派の教会建築よりも城塞の大規模修復に主眼が置かれている。また、ワラキア地方のコンスタンツァ県は、古代ローマに関する遺跡が対象である。

個別の事業費を比較すると、宗教建築でもっとも大きいのは、ワラキア地方の重点案件であったヴルチャ県のホレズ修道院で、次いで、スチャヴァ県のスチェヴィツァ修道院、ドラゴミルナ修道院となっている。後に、ホレズ修道院とスチェヴィツァ修道院は、その後世界遺産リストに記載されることとなる^{注23)}。

2.6. イオアナ・グリゴレスクの役割

社会主義政権下、正教会の修道院や教会の修復がもっとも進むのは1960年代後半から70年代初頭であるが、さらに注目すべきは、スチェヴィツァ、ドラゴミルナの2修道院、ならびにヴォロネッツ旧修道院において「現行の事業を今日の精神にもとづく手法によって強調する」^{注24)}、すなわち現代風の設計手法をもって修復事業にあたったことが明記されている点である。その役割を一身に担ったのが修復建築家イオアナ・グリゴレスク^{注25)}である。彼女の担当した3案件だけでスチャヴァ県の7割以上の事業費が充当されている(全国総事業費の11.0%)。

2006年に亡くなる前に研究者らによって同氏のインタビューを行い、同時に図面の提供を受けたので、ここで改めて分析する。残された図面類は、上記3修道院以外にセク、シハストリア修道院、宮殿、古代ローマ遺跡などの修復案件が加わり、種別としては配置図、平面図、断面図等に加えてスケッチや詳細図など多岐に及ぶ。

ドラゴミルナ修道院の図面をみると明らかに修理図面ではなく、新規計画図となっている。主体施設である聖堂、ならびに囲壁については保存すべきオセンティックな建造物として留保し、付属施設たる僧房は新規の建造物として新たにデザインする。鉄筋コンクリートを用い、伝統に想を得ながらも新しい手法を試みた。さらに井戸や四阿など付属工作物の図面も、モルドヴァの木造建築を敷衍し

Table 1 Conservation Restoration Projects in Romania in the 1960's, edited from the budgetary table in "Buletinul Monumentelor Istorice", Anul XXXIX, Nr.1, 1970

County	Site	Building Category	Year	Operation Cost (lei)
București Municipality	Patriarchate	Romanian Orthodox	1960-1963	1,452,698
	Sf. Troiță Monastery - Radu Vodă -	Romanian Orthodox	1962-1969	1,321,462
	Casa Enăchiță Văcărescu	House	1963-1966	2,453,998
	Mărcuța Monastery	Romanian Orthodox	1967-1969	537,039
Alba	Feudal Complex of Sebeș City	Urban Complex	1960-1969	4,002,971
	Village Fortress with Romanesque Church in Cricău	Reformed	1961-1964	1,089,394
	Cilnic Fortress	Evangelical	1961-1964	1,058,187
	Alba Iulia Fortress	Fortress/Castle	1961-1964	417,940
	Ruin of the Romanic Church in Gîrbova	Religious, Ruin	1966	97,181
	Alba Iulia Orthodox Cathedral - a Reîntregirii -	Romanian Orthodox	1967-1969	2,153,835
	Alba Iulia Roman Catholic Cathedral	Roman Catholic	1967-1969	1,317,870
Argeș	Bărăția Ensemble at Cîmpulung	Roman Catholic	1963-1965	1,636,082
	Sf.Gheorghe Church at Pitești	Romanian Orthodox	1963-1968	1,237,999
	Episcopal Church at Curtea de Argeș	Romanian Orthodox	1964-1968	1,312,157
	Brădet Skete	Romanian Orthodox	1964-1966	543,146
	Aninoasa Monastery	Romanian Orthodox	1968-1969	288,649
Bihor	Roman Catholic Cathedral at Oradea	Roman Catholic	1960-1963	880,407
	Wood Church at Delurenii in Beznea	Romanian Orthodox	1964-1965	167,173
Bistrița Năsăud	Wood Church at Chiraleș	Romanian Orthodox	1963-1964	153,777
Botoșani	Wood Church Sf. Dumitru at Vornicenii	Romanian Orthodox	1968	40,841
Brașov	Village Fortress with Evangelical Church at Prejmer	Evangelical	1960-1969	5,972,632
	Old Hall (Casa Hirscher) at Brașov	House	1960-1961	1,462,669
	Făgăraș Citadel	Fortress/Castle	1965-1969	11,719,906
	Emsemble of Sf. Nicolae Church at Șcheii Brașov	Romanian Orthodox	1968-1969	458,089
	Neagră (Black) Church at Brașov	Evangelical	1968-1969	189,772
Cluj	Reformed Church at Cluj	Reformed	1960	327,534
	Roman Catholic Church Sf. Mihail at Cluj	Roman Catholic	1960-1964	2,527,130
	Roman Catholic Church at Florești	Roman Catholic	1961-1963	581,686
	Fortress at Dăbica	Fortress/Castle	1969	150,000
Constanța	Roman Ensemble with Mosaic at Constanța	Antiquity	1960-1969	10,981,769
	Antic Grave at Mangalia	Antiquity	1960	518,854
	Mosque at Mangalia	Muslim	1960-1962	416,880
	Triumphal Monument and Municipium Tropaeum Traiani at Adamclisi	Antiquity	1960-1969	1,717,907

County	Site	Building Category	Year	Operation Cost (lei)
Constanța	Rock-hewn Ensemble Besarabi at Mulfatlar	Religious, Ruin	1960-1969	2,505,602
Dîmbovița	Princely Court at Tîrgoviște	Palace	1961-1969	4,788,359
	Sf. Vineri Church at Tîrgoviște	Romanian Orthodox	1968-1969	794,436
Gorj	Tismana Monastery	Romanian Orthodox	1960-1968	260,344
Hunedoara	Sf.Nicolae at Densus	Romanian Orthodox	N/A	263,963
	Corvineștilor Castle at Hunedoara	Fortress/Castle	1965-1969	5,324,778
Iași	Trei Ierarhi Church and Gothic Hall in Iași	Romanian Orthodox	1960-1961-1963-1968	1,244,779
	Metropolitan Cathedral of Iași	Romanian Orthodox	1960	144,586
	Dosfete's Printing House	House	1960-1967-1969	732,639
	Galata Monastery at Iași	Romanian Orthodox	1961-1969	3,935,109
	Cetățuia Monastery at Iași	Romanian Orthodox	1964-1969	2,041,100
	Barnovski Church at Iași	Romanian Orthodox	1968	68,920
	Sf. Dumitru Church at Hîrlău	Romanian Orthodox	1968	45,781
	Bîrnova Monastery at Iași	Romanian Orthodox	1968-1969	74,278
	Sf. Spiridon Church at Iași	Romanian Orthodox	1968	94,929
	Sf. Apostoli-Borboi at Iași	Romanian Orthodox	1968	62,383
	Frumoasa Monastery at Iași	Romanian Orthodox	1968	17,971
	Sf. Ion cel Nou Church - Nicorița - at Iași	Romanian Orthodox	1968	140,513
Ilfov	Balamuci Skete at Balta Naegră in Nuci	Romanian Orthodox	1960-1962	440,944
	Căldărușani Monastery in Brazil	Romanian Orthodox	1960-1964	667,736
	Casa Udriște Năsturel at Herești	House	1964-1969	2,089,256
Maramureș	Wood Church Sf. Arhangheli at Plopiș in Șisești and Wood Church Sf. Arhangheli at Remetea Chioarului	Romanian Orthodox	1960-1961	533,487
	Wood Church "Din deal" at Ieud, Wood Church "Din vale" at Ieud, Wood Church Cuvioasa Paraschiva at Botiza and Wood Church at Poienile Glodului	Romanian Orthodox	1961-1962	702,689
Mehedinți	Drobeta Castle at Turnu Severin	Fortress/Castle	1960-1963	605,507
	Strehaia Monastery	Romanian Orthodox	1963-1969	1,648,179
	Strămutarea Monument at Porțile de Fier	Urban Complex	1967-1969	11,720,440
Mureș	City Fortress Tg. Mureș with Reformer Church	Reformed	1963-1969	4,460,064
	Wood Church Sf.Arhangheli at Chețani	Romanian Orthodox	1967-1968	200,767
Neamț	Neamț Monastery	Romanian Orthodox	1960-1961-1963, 1968	3,959,276
	Agapia Monastery	Romanian Orthodox	1961-1962-1968	722,477

County	Site	Building Category	Year	Operation Cost (lei)
Neamț	Neamț Fortress	Fortress/Castle	1963-1969	3,841,411
	Secu Monastery	Romanian Orthodox	1966-1969	1,952,851
	Văratec Monastery	Romanian Orthodox	1968	120,936
	Bistrița Monastery	Romanian Orthodox	1969	320,000
Olt	Căluu Monastery	Romanian Orthodox	1967-1969	254,489
Prahova	Brebu Monastery	Romanian Orthodox	1960, 1963	995,764
Sălaj	Wood Church at Petrindu Mare	Romanian Orthodox	1965-1966	287,673
	Wood Church at Cizer	Romanian Orthodox	1967-1968	290,010
	Wood Church Sf. Arhangheli at Baica in Hida, Wood Church Sf. Arhangheli at Poarta Sălajului in Românași	Romanian Orthodox	1969	180,000
Sibiu	Ruined Cistercian Monastery at Cîrța	Religious, Ruin	1961-1962	116,622
	Sfântului Tower at Sibiu	Antiquity	1961-1962	296,804
	Fortress with Romanesque Church Sf. Mihail at Cîsnădioara	Roman Catholic	1961-1962	799,320
	Old City Hall of Sibiu	House	1967-1969	577,133
Suceava	Sucevița Monastery	Romanian Orthodox	1960-1969	8,964,423
	Humor Monastery	Romanian Orthodox	1960-1961 1967-1969	428,707
	Salatina Monastery	Romanian Orthodox	1960-1961 1968-1969	653,831

County	Site	Building Category	Year	Operation Cost (lei)
Suceava	Former Voroneț Monastery	Romanian Orthodox	1961-1968 1969	1,650,221
	Dragomirna Monastery	Romanian Orthodox	1961-1969	6,567,460
	Scaun Fortress at Suceava	Fortress/Castle	1961-1969	2,291,422
	Princely Han at Suceava	Palace	1964-1967	1,216,543
	Church of the Beheading of St Ioan Botezătorul of Arbore	Romanian Orthodox	1964-1968	668,971
	Moldovița Monastery	Romanian Orthodox	1965-1969	1,352,139
	Putna Monastery	Romanian Orthodox	1968-1969	360,608
	Rîșca Monastery	Romanian Orthodox	1968	118,991
	Proboata Monastery	Romanian Orthodox	1968	30,735
	Sf. Nicolae at Bălinești in Grămești	Romanian Orthodox	1968	113,249
	Wood Church Sf. Nicolae at Broșteni	Romanian Orthodox	1968	67,784
Tulcea	Coșu Monastery at Niculițel	Romanian Orthodox	1960	54,088
Vilcea	Cozia Monastery	Romanian Orthodox	1960-1962	1,020,265
	Cornet Monastery	Romanian Orthodox	1960	232,785
	Hurezi Monastery	Romanian Orthodox	1960-1969	10,454,993

※Except cases of "Urgent Intervention" and "Restoration for the Installation of Electricity in Interior" from the original list.

Fig.1 Administrative Map of Romania by County, 1968

The pie chart shows the percent of each prefecture's expense to national total regarding Conservation Restoration Projects in Romania in the 1960's (Table 1)

た意匠で、全体のデザイン・ポリシーを補完している。

1960年代前半に始められたこれらの修復事業は、当時の文化状況を反映してルーマニア固有の価値観や美学を表すことが求められた。ルーマニアの伝統デザインを極めながら高度の造形性を示す彼女のデザインは局幹部の関心を惹き、バルシュの後継者としてのポジションを得る。生前の彼女からの聞き取りや残された図面からその一端を伺うことができる (Fig.2)。彼女の振り当てられた多大の予算は、ルーマニアの歴史遺産の顔となるよう、当初建築の修復に加えて新たなデザインの僧房・展示室等の建設に充てられた。

2.7. 正教会の役割

正教会にとってスチャヴァー帯は揺籃の地と見なされるが、当時、この地で修道院として機能していたのは、プトナ、スチェヴィツァ、モルドヴィツァ、ドラゴミルナの4修道院のみで、他はこの地を第一次大戦期まで統治していたオーストリア＝ハンガリー帝国による世俗化政策によって19世紀後半に閉鎖されていた。この点は、保存修復事業を推し進める歴史的記念物局にとって逆説的にプラスに働き、修道院ならびにそれを管轄するスチャヴァー大主教座との面倒な手続きを経ることなく工事を進めることができた。この時期の遺産保護はリベラルな環境の中で「共産党の追い求めるイデオロギーや目標とはまったく関係ないところでその事業が行われていた」ため、王政時代よりもスムーズに進んだとまで言われている^{注26)}。

歴史的記念物局にとって追い風となったのは、1967年に国連によって大々的になされた国際観光年キャンペーンであった。歴史文化遺産はルーマニアの観光資源としての価値を付与され、地域ごとに特徴的な遺産群が抽出される。フレスコ画で内外壁を埋め尽くしたモルドヴァの修道院群、マラ・ムレシュの木造教会群、トランシルヴァニアの福音派(ルター派)のゴシック聖堂群などが選出され、保存修復のための予算枠が拡大される。この年の観光客は微増に留まり、観光年としてのプロモーションは必ずしも成功とはいえないが、遺産保護に弾みがついたという点ではその後に与えた影響は大きかった。グリゴレスクが担当した中世修道院は、国賓クラスの接待施設として利用され、実際に1979年にはヴォロネッツ旧修道院に日本の皇太子・皇太子妃夫妻(当時)が招待されている^{注27)}。

グリゴレスクは1972年に定年となった以降は活躍の場を失い、実質的に修復事業から引退した。彼女のアイデアはその後、継承されることなく、保存修復事業におけるこの種の大型案件がなくなるが、時期的にはチャウシェスクの新たな文化政策に対応している。

3. 歴史都市の再編問題

3.1. 国土体系化政策

社会主義期のルーマニアの国土計画・都市計画を語る際、西欧型の都市整備の枠組みを「科学的」かつイデオロギー的に組み直した「体系化」(sistematizarea)なる概念が用いられている点に注目したい^{注28)}。建設省にあたる国家委員会(建設・建築・国土体系化国家委員会)の名称にもこの用語が冠せられる。この用語自体は、古い都市を整備して新たな都市空間をつくり出すという意味で1920年代から「都市計画」を指して用いられていたが、社会主義政権によって包括的な国土計画のスケールに拡大解釈され、社会主義国家のイデオロギーに読み替えられる。具体的には、5か年計画をベースとして産業、インフラ、居住基盤を繋いだネットワークを下敷きとして国土の「体系化」をめざし、とりわけ国の近代化を妨げている農業依存型の経済を第二次・第三次産業型にシフトさせるべく、都市化の推進が主眼となる。社会主義政権の成立にともなって1948年に土地国有化が宣言され、15年ほどをかけて山岳部を除く耕作可能な土地において農業の集団化が実施された。これにより生じた農村部の余剰労働人口を都市に移住させることが目論まれる。重工業、特に機械・化学工業のプラントを全国に分散配置し、都市周縁部における工業地区開発を行うとともに、オネシュティ(モルドヴァ地方南部)に代表される村落部の工業都市化に焦点が当てられた。このようにして、総人口に対する都市人口比は1948年の23.4%から1977年の43.6%へと30年間で倍増する^{注29)}。

チャウシェスクはこの国土政策を徹底させることを目論み、その手始めとして1972年に国土体系化のための包括的なプログラムを發布する。その基本は経済基盤の構築を目的とした人口増加施策の推進にあり、生産拠点としての都市ネットワークの拡充をめざした。そのため、人口1万人以上とされる「市」(oraş)に加えて、各県で重点的にいくつかの「村」(comună)を選定し、生産施設等を配備した人口5000人程度の町をつくり、恣意的に市制を適用するというものである^{注30)}。そのプログラムの法的根拠となるのが1974年の「地域ならびに都市・農村集落の体系化に関する立法、第58」^{注31)}で、その後の四半世紀の間に全国で相当数の小規模都市整備を行うことが定められた。そこから外れた農村部の集落に対しても、公共施設をとめない歴史遺産を重んじた施策を打ち出している^{注32)}。

国土ネットワークを、従来の数十ほどの歴史的中核都市による単一ネットワークから地域ごとの新都市サブグループをともなった複

Fig.2 Drawings of Dragomirna Monastery by Ioana Grigorescu (left: Site Plan, right: Section), s.d., Grigorescu Own Collection

合ネットワークに変換するという大胆な試みであるが、これらを全面的に実現に移すための財政基盤を欠き、喫緊の課題である都市化が優先的に実施対象となった。その結果、1971年から5年間で340の集落が選ばれ、コンパクトな集合住宅地と生産施設をともなった小規模新都市の計画がなされる^{注33)}。逆に集団化の対象となった農村部は、都市部への人口移動が進み、生産性がさらに落ちた結果、衰退の兆しが顕著となる。

3.2. 歴史都市と中心市街地

1970年代に入って、国土体系化政策は既存の都市の都市計画に及ぶようになる^{注34)}。ルーマニアの都市は、人口180万人(1977年)を数える首都ブカレストに対して他の都市の人口は数万から30万人程度であったが、長い歴史文化に裏付けられたものが多い。とりわけモルドヴァとトランシルヴァニアはその点が顕著であり、当初は農村部が多くを占める南部のムンテニアやオルテニアに向けられていた国土体系化の枠組みからは外れていた。

歴史都市の問題は1970年代に入って識者たちの間で強く意識されるようになり、その点ではフランス、ドイツなど西欧諸国の都市保存の議論と時間的な隔たりはあまりない。実際、リベラルな気風をもつ歴史的記念物局(DMI)は1970年代初頭になってブカレストを筆頭にクライオヴァ、ブライラ、コンスタンツァ、スチャヴァなど25都市を歴史的都市として認定している。1960年代に歴史的記念物局長を務めたグリゴレ・イオネスク^{注35)}が同局の公式媒体でもある『歴史的記念物紀要』(Buletinul Monumentelor Istorice)誌上で「体系化」の用語を用いつつ、ユネスコの歴史地区保護の施策を下敷きにシビウ、クルージュ、ブラショヴなどトランシルヴァニアの歴史都市の重要性を指摘していることを見れば、当初議論されていた国土体系化の理念は1970年代後半に入って顕著となる歴史性排除の施策とは位相を異にしていたことが理解できよう^{注36)}。

こうした1970年代前半の歴史都市保護の機運はそのまま国際機関や西欧諸国の動きと連動し、とりわけ1975年の欧州建築遺産年に対しては歴史的記念物局を挙げて関与し、ユネスコやイコモスの活動に積極的に参画し、国際基準の導入に務める。同時に、グリゴレスクによって「修復」されたいくつかの修道院が、大きな役割をもって発信されている。その一方で、1974年の国土体系化法により、都市部の詳細計画の作成が義務付けられ、歴史地区をめぐる再開発に対する判断が迫られるようになる。

この動きに決定的な影響を与えたのが、1975年7月初めにルーマニア南部を襲った観測史上最大の洪水であり^{注37)}、2年後の1977年3月4日にブカレスト一帯を襲ったヴランチャ地震である^{注38)}。特に後者の地震は、全壊・半壊を含めてルーマニアの住戸総数の13%に被害を与えるというきわめて深刻な事態をもたらした。震災復興が何よりも大きな課題としてのしかかった。それまで歴史的環境に宥和的な姿勢を見せていたチャウシェスク政権が再開発を主眼とした都市改造に舵を切るのもこの地震を契機としてであった。歴史遺産を統括する歴史的記念物局も同年、経済文化遺産局(Direcția Economică și Patrimoniului Cultural Național = DEPCN)へと改組され、遺産保護の考え方自体が国土体系化政策の中に包摂されると同時に予算、人員面で大幅な削減にあう。

4. 考察 社会主義政権における文化遺産の諸問題

4.1. チャウシェスク政権前期の体系化と文化遺産政策

ルーマニアの社会主義政権の地域政策を一言で表すのが「体系化」なる用語であるが、本来、この語は都市計画を指す専門用語として1930年代から用いられていた。社会主義政権になってマルクス主義的な解釈が上乗せされ、科学的かつトップダウン的な計画理論として把握されるようになり、共産党委員会の下で国内の産業構造の転換や都市化を重点的な政策課題として国土全体の体系化が図られる。その結果、単一規格のインフラ、標準仕様の集合住宅等によって都市の均質化が促進され、地域ごとに豊かな歴史遺産を擁していた地方都市の脱歴史化が進展する。ただ、文化政策という視点で眺めた場合、必ずしもソ連型の画一主義ではなく、ルーマニア独自の造形や表現にこだわり、その文化的アイデンティティの追求に多大の予算と専門家が振り向けられた。グリゴレスクのような力ある建築家が登用されたのが、その証しである。

時として独裁的な権力を行使したチャウシェスクの文化政策の基盤にあったのは「ホモ・ソヴィエティクス」と呼ばれる社会主義的人間像の創出にあった。民族衣装を被りながらもマスゲームやスポーツに興じる若者を想定し、そのヴィジョンを徹底させた上で都市建設や施設計画、遺産の活用を図ったことで、同時代の東欧社会主義国家のリーダーの中でも特異な存在である。少なくとも1977年のヴランチャ地震の前において、地方都市に散在する歴史遺産は大いに活用が見込まれるものであり、国民の86%を数える信徒を擁する正教会との融和を図る上でも教会遺産の視覚化は重要な課題であった。宗教建築の歴史性を宗教性とは巧みに分離し、教会の関与を最小限にして歴史的記念物の専門家に保存修復を任せる姿勢は当初、脱宗教化が進んだ西側諸国や国際機関でも評価されていた。オーストリア＝ハンガリー支配の時期に廃止されたヴォロネツ修道院をグリゴレスクの手によって修復し国賓接待に用いたように、歴史的建造物は外交手段としても有効であった。1989年のルーマニア革命後、これらの中世修道院がユネスコ世界遺産にすみやかに登録されたのも、この時代の研究や保存修復作業の蓄積があったからに他ならない。

しかし、1970年代後半になっても社会主義政権特有の硬直した官僚機構ゆえに体系化の目標値到達には程遠く、しかも増大する対外債務から国の財政事情が悪化したこともあって、文化部門(社会主義文化教育常務委員会)は大幅な組織改編が迫られる。それまでの社会主義の広報・教育担当としての文化省の機能が失われ、組織が縮小されたところにヴランチャ地震が決定的な打撃を与えた。

4.2. 教会遺産の保存修復

社会主義時代における教会遺産の保存修復事業を追跡するには、当事者である正教会の意思と国の歴史的記念物局(DMI)による修復事業計画の双方を擦り合わせて考えなければならない。政権とルーマニア正教会との関係は、ソ連式の徹底した宗教弾圧ではなく、政権側が飴と鞭を使い分けながらさまざまな懐柔策を弄して総主教座を取り込み、人心掌握のために教会を積極的に利用する方向で動いていた。その中で歴史遺産を所管する歴史的記念物局は、高度の専門性ゆえに戦前の王政時代からの遺産保護の流れを引き継ぎ、必ずしも社会主義イデオロギーに与しない半ば独立した専門機関であった。ただ、19世紀の世俗化政策の延長線上に神学ではなく近代科

学で動くという点では、政権のイデオロギーとは別の意味で修道制の理念と対立する。それでも、多くの中世修道院を擁し人々の信仰心も篤いモルドヴァ地方に見られるように長年の保存修復事業の蓄積は、聖職者とそれを支える地元民による教会コミュニティと専門部局の間で継続的な人的交流を生み出し、資金や資材を臨機応変にやりくりする環境を培った。人々の尊敬を集めていた修復建築家シュテファン・バルシュが後に語ったように、「現実にはいろいろと問題がありましたが、修復事業のある部分は教会（総主教座、府主教座、主教座）や地元自治体が引き継ぎ、記念物局が提供した人材や資材を用いてきました。このようにして以前に始まった事業が今日の新しい計画に繋がっているのです。」^{注39)}

5. 結語

20 世紀の政治的変動の中で生み出された東欧の社会主義国家群の中でもルーマニアは、正教会を基盤とする従来の伝統規範と「ホモ・ソヴィエティクス」を追求するイデオロギーとのせめぎ合いの中でルーマニア独自のアイデンティティを強く打ち出した文化政策を立ち上げる。中世の修道院を中心とする歴史遺産はそれ自体が世界にアピールする視覚的な装置であり、チャウシェスク政権はむしろそれらを積極的に活用して国際社会の中で自国のアピールをはかった。少なくとも 1977 年のヴランチャ地震に到るまでのチャウシェスク政権前期においては、特徴的な教会・修道院の保存活用に加えて、いかなる教会も原則として「壊さない」ことを基本として地域社会の安定化をはかり、それゆえにソ連のような徹底した宗教建築の破壊を免れることができた。その中で、歴史的記念物局とその周りの専門家集団は第二次大戦前からの遺産保護の思想を継承し、政権と正教会の間の微妙なバランスをうまく利用して実際の修復案件を巧みに誘導して壁画修復を含めた中世建築遺産の保護修復の方法論を立ち上げる。この蓄積が大きく崩れるのは、1977 年以降のチャウシェスク政権後期であるが、その考察は次の論文に譲りたい。

参考文献

- 1) Ion Dodu Balan: Cultural Policy in Romania, The UNESCO Press, Paris, 1975
- 2) Vasile Cucu: Sistemizarea teritoriului și localităților din România, Editura Științifică și Enciclopedică, București, 1977
- 3) Olivier Gillet: Religion et nationalisme - L'Idéologie de l'Eglise roumaine sous le régime communiste, Edition de l'Université de Bruxelles, 1997
- 4) Lavinia Stan, Lucian Turcescu: Religion and Politics in Post - Communist Romania, Oxford University Press, Oxford / New York, 2007
- 5) Riichi Miyake, Shuji Hanyu ed.: World Heritage in Moldavia and its Restoration, Nishimura Shoten, Tokyo, 2009 (in Japanese)
三宅理一・羽生修二監修: モルドヴァの世界遺産とその修復—ルーマニアの中世修道院美術と建築, 西村書店, 2009
- 6) Liliana Iuga: Reshaping the Historic City under Socialism - State Preservation, Urban Planning and the Politics of Scarcity in Romania (1945-1977), dissertation, Central European University, Budapest, 2016
- 7) Florin Abraham: Romania since the Second World War - A Political, Social and Economic History, Bloomsbury Academic, London, Oxford, 2016
- 8) Bultinul Monumentelor Istorice, bi-annual magazine between 1970 -1973
- 9) Monumente Istorice și Artă, bi-annual magazine between 1974 -1980

注

注1) 展覧会「中世ルーマニアの文化遺産とヨアナ・グリゴレスクの世界」(於

日本建築学会建築博物館, 2003年12月4-26日) が開催され、同氏の図面が展示された。

注2) ルーマニアの宗教団体はルーマニア正教会(人口の86%)を筆頭にギリシア・カトリック教会、ローマ・カトリック教会、プロテスタント諸派などさまざまである。ギリシア・カトリック教会はトランシルヴァニアに多く、1948年以前は150-200万人の信徒。1866年(1923年、1938年改訂)の憲法では正教会とギリシア・カトリック教会を「国家教会」として国による財政支援、聖職者の給与支給などを保証していたが、1948年の宗教法改正でギリシア・カトリック教会はそこから外され、正教会に合体して資産の多くを正教会に譲渡することとなった。その際、正教への改宗を拒んだ主教、司祭ら600名ほどが投獄された。宗派としてはカトリック、プロテスタントを含む14宗派が存続を許されたが、その他は違法とされた。

注3) 王政時代は宗教芸術省 (Ministrul Cultelor și Artelor, 1944-1945)、芸術省 (Ministerul Artelor, 1945-1947)。社会主義政権期の文化担当省庁の履歴は以下になる。芸術省 (Ministerul Artelor, 1947-1948)、芸術情報省 (Ministerul Artelor și Informațiilor, 1948-1949)、芸術省 (Ministerul Artelor, 1949-1950)、芸術委員会 (Comitetul pentru Artă, 1950-1953)、文化省 (Ministerul Culturii, 1953-1957)、教育文化省 (Ministrul Învățământului și Culturii, 1957-1962)、文化芸術国家委員会 (Comitetul de Stat pentru Cultură și Artă, 1962-1971)、社会主義文化教育常務委員会 (Consiliul Culturii și Educației Socialiste, 1971-1989)。

注4) Florin Abraham, Romania since the Second World War - A Political, Social and Economic History, Bloomsbury Academic, London, Oxford, 2016, p.47

注5) Ion Dogu Balan with the co-operation of the Directorates of the Council of Socialist Culture and Education: Cultural Policy in Romania, The UNESCO Press, Paris, 1975, pp.22-24

注6) 1974年の第11回ルーマニア共産党大会において採択した「共産主義者の仕事と生活ならびに社会倫理と公正性に関する綱領」では理想的人間像に関する31点が整理され、社会主義に生きる「新しい人間」が提示された。

注7) Mihai C. Bocarnea, Bramwell Osula: Edifying the New Man - Romanian Communist Leadership's Mythopoeia, *International Journal of Leadership Studies*, Vol.3. Iss.2, 2008, p. 207

注8) Ștefan Lupu Balș (1902-1994)。ブカレスト高等学校建築コース(1921-1927年)卒業後、ローマのルーマニア・アカデミーへ留学(1928-1929)。ローマ・ラ・サピエンツァ大学建築学部にて、イタリアの修復プロジェクトを研究。1930年から1950年の廃止までブカレストの歴史的記念物委員会に技師として勤務。1953年「ルーマニア国土体系化・都市計画研究所」(ISPROR - Institutului de Sistemizare și Proiectare a Orașelor din România)内に歴史的記念物局を設立。1960年からは建設・建築・国土体系化国家委員会(Comitetului de Stat pentru Construcții, Arhitectura și Sistemizare=CSCAS)の主任建築家として1978年の歴史的記念物局廃止まで勤務。革命後、歴史的記念物委員会の委員となり、歴史遺産保護体制の立て直しに貢献。1993年アカデミー名誉会員。

注9) ルーマニア正教会は国家教会として位置付けられていたことで、所管する宗教課(Departamentul Cultelor)が1959年まで暫定的に教会建築の維持修理を行っていた。

注10) Christian Vasile, Proiecte de Reorganizare a Direcției Monumentelor Istorice in Anni 1960, Studii și Cercet. Ist. Art., Artă Plastică, serie nouă, tom 3 (47), București, 2013, pp.151-155

注11) Pompiliu Macovei (1911-2000)。イオン・ミンク建築大学卒業、建築家として活躍し、戦後、ブカレスト市の主任建築家として1950年代の社会主義リアリズムの都市計画を主導。ルーマニア建築家協会会長を経て文化芸術国家委員会委員長(文化大臣)、外務国家委員会副委員長(外務副大臣)等の要職を歴任。

注12) 1960年代後半の映画ブームについて映画史の分野では、当時のルーマニア映画が多用した古代ダキア人の衣装から「ペブルム黄金時代」と評される。Aurelia Vasile 'Industria cinematografică roumaină au service de la nation. Les enjeux de la production des films sur l'antiquité durant la période communiste', in Bogdan C. Iacob, History of Communist in Europe (Vol.III) Communism, Nationalism, and State Building in Post-War Europe, ZETA Books, Bucharest, 2012, pp.147-167

注13) Constantin Burduce (生没年不詳) 大戦中にルーマニア民主司祭連盟(Uniunea Preoților Democrați Români)に参加。戦後の1945年にペトル・グローザ政権の宗教大臣に任じられるが翌年には解任、1948年には亡命、

- 南米に渡る。
- 注14) 総主教ユスティニアン・マリナ (Justinian Marina, 1901-1977、在位1948-1977) は、オルテニアのルムニク・ヴルチャ小教区の司祭で妻帯していたが(妻は1933年に死去)、収容所から脱走したゲオルギューデジをかくまった縁で、彼と親交を結ぶようになる。1945年に大司教、1947年に府主教に叙階。翌1948年に総主教の座に就くことになったのはゲオルギューデジの支援があったといわれる。
- 注15) Lavinia Stan, Lucian Turcescu: Religion and Politics in Post-Communist Romania, Oxford University Press, Oxford / New York, 2007, pp.65-89
- 注16) 1959-60年の1年間に92の正教会の教会・修道院が閉鎖、多くの司祭、修道士、修道女が投獄された。それでも100あまりの修道院は残る。Florin Abraham, *op.cit.* p.50
- 注17) Lavinia Stan, Lucian Turcescu, *op.cit.* pp.18-25
- 注18) Nestor Vornicescu: Desăvîrșirea unității noastre naționale, fundament al bisericii străbune, Editura Mitropoliei Olteniei, Craiova, 1988, quoted in Olivier Gillet: Religion et nationalisme - L'Idéologie de l'Eglise roumaine sous le régime communiste, Edition de l'Université de Bruxelles, 1997, p.83
- 注19) Ion Scurtu: Politică și viață cotidiană în România - în secolul al XX-lea și începutul celui de al XXI-lea, Editura Mica Valahie, București, 2012, pp.325-326
- 注20) Principalele Lucrări de Restaurare a Monumentelor Istorice din Republica Socialistă România (1959-1969), *Buletinul Monumentelor Istorice*, Anul XXXIX, Nr.1, 1970, pp.71-76
- 注21) ルーマニアの文化予算は1970年で921,700,000レイ、1974年で1,039,600,000レイである。歴史遺産の保存修復事業費はそのおよそ15%に対応する。Ion Dodu Balan with the co-operation of the Directorates of the Council of Socialist Culture and Education, *op.cit.* p.63
- 注22) 1970年の公定レートで1 US\$=1,667 Romanian leu
- 注23) Mănăstirea Hurezi (Vâlcea) は、コンスタンチン・ブルンコヴェスにより1690-1709年に建設された。ブルンコヴェネスク様式芸術の傑作であること、壁画とイコンの芸術性が、ブルガリアやモルドヴァなどの近隣諸国やバルカン地域の宗教芸術・建築に大きな影響を与えたことが評価され、1993年にユネスコ世界遺産に登録された。Mănăstirea Sucevița (Sceava) はゲオルグ・モヴィラ府主教により1582-1584年建設、1595年に北・南面扉口を増築、1601年またはその数年内に壁画が完成した。2010年に世界遺産「モルドヴァの教会群」に追加登録された。
- 注24) 原語では“accentuarea intervențiilor actuale prin tratarea lor în spirit contemporan”, “Principalele Lucrări de Restaurare a Monumentelor Istorice din Republica Socialistă România (1959-1969)”, *op.cit.* pp.71-76
- 注25) Ioana Grigorescu (1915-2006)、1941年にイオン・ミンク建築大学を卒業、設計事務所に勤務した後、母校の助手となる。1950年代に入り、修復建築家として歴史的記念物局のプロジェクトを担当するようになり、モルドヴァ地方の一群の建築に加えて、セク、シハストリア修道院などを手掛ける。ヴィクトール・ダン・キシレヴィッチ: 建築家イオナ・グリゴレスク、三宅理一・羽生修二監修: モルドヴァの世界遺産とその修復-ルーマニアの中世修道院美術と建築, 西村書店, 2009, pp.253-270
- 注26) Sanda Ignat: Arhitectul Ștefan Balș Despere Restaurarea Monumentelor, (Interview avec l'architecte Șt. Balș, personnalité proéminente de l'architecture de restauration roumaine) *Buletinul Comisiei Monumentelor Istorice*, Anul II, Nr. 4, Bucuresti, 1991, pp.49-54
- 注27) ヴォロネッツ旧修道院の修復は 1962-1970年にかけて行われ、イオアナ・グリゴレスクが担当した。当初は聖堂・付属施設の修復ならびに宿舍の建設がなされ、壁画修復は1980年代に入って開始された。
- 注28) 国土の「体系化」(sistematiizare) が国の政策概念として公式に提示されたのは1967年12月の共産党大会とされるが、実際にはゲオルギューデジ政権下で国土計画の指針として既にこの用語が掲げられている。
- 注29) その間、27.1%(1956)、32.0%(1966)の数値を示す。Per Ronnäs: Urbanization in Romania - A Geography of Social and Economic Change since Independence, The Economic Research Institute, Stockholm School of Economics, Stockholm, 1984, pp.198-206
- 注30) チャウシェスク時代のルーマニアの地方自治は、ソ連をモデルとして導入された行政管区(raion) 制が1968年になって王政時代の県制度に戻さ

- れ、県(județ)、市/村の二層からなっていた。基礎自治体は人口1万人を目途に村(comună)と市(orăș)に分類され、都市化政策の過程で多くの村が半ば人為的に市に格上げとなった。村の数は3000ほどで、都市化の促進によって市の数は148市(1948)、171市(1956)、184市+238郊外村(1966)、233市(1968)、237市(1989)と増加する。加えて、都市化目標の達成のため、1956年以降、都市の指標が再編成され、村でありながら市と同格とみなされる「都市型集落」(localități de tip urban)が多く出現した。これらは法的には村であるが、人口は都市人口とみなされる。1956年の国勢調査では183の「都市型集落」が出現し、その人口は全都市人口の13.3%に及んだ。1989年には543の都市型集落が存在した。Benedek József: Urban Policy and Urbanization in the Transition Romania, *Romanian Review of Regional Studies*, Vol.II, Nr.1, 2006, pp.51-64
- 注31) Lege nr. 58/1974 (“Buletinul Oficial” 1 noiembrie 1974), privind “Sistematiizarea teritoriului și localităților urbane și rurale”
- 注32) Ilarion Țiu: Ceaușescu și problema sistematiizării rurale, *Sfera Politicii*, Vol. 22 Issue 2, mar/apr 2014, pp.9-15
- 注33) Vasile Cucu: Sistematiizarea teritoriului și localităților din România, Editura Științifică și Enciclopedică, București, 1977, p.207
- 注34) 1974年の国土体系化法 (Legea nr. 58/1974“, în Buletinul Oficial nr. 135, 1 noiembrie 1974) は、西側諸国であれば農村計画法と都市計画法を兼ねたものであるが、その主たる目的が農村部の都市化にあり、規制と誘導によって都市の適度の発展計画を促すというよりは、産業施設の再配置にともない農村を無理やりコンパクト化して都市的な中心市街地をつくり出すことが主眼で、実態としてはゲッター的な不良住宅地を数多く生むことになった。
- 注35) Grigore Ionescu (1904-1992)。ローマのルーマニア・アカデミー留学生(1931-1933)、1930年代後半からルーマニアの歴史的建造物に関する研究を始め、建築遺産保護の分野で活躍。イオン・ミンク建築大学教授、歴史的記念物局長(1963-1966)を歴任。1991年にアカデミー会員。
- 注36) Grigore Ionescu: Necesitatea sistematiizării și restaurării entrelor istorice, *Buletinul Monumentelor Istorice*, Anul XXXIX, nr. 1, anul 1970, pp.37-40
- 注37) 1975年7月1日から4日にかけて発生した大洪水は、ルーマニア南東部のシレット川、アルジェス川、ブラホヴァ川、ブザウ川などの氾濫により60,000㎢の冠水地域をもたらした。
- 注38) ヴランチャ地震は、1977年3月4日の夜半に発生したマグニチュード7.5の地震。32,897棟の建造物に被害(住戸742,259戸、社会施設8,228棟)、1,527名の死者(うち1,424名はブカレスト)、負傷者11,221人に及んだ。ICCPDC(Institutul Central de Cercetare, Proiectare și Directivare în Construcții) Report, 1978
- 注39) Sanda Ignat, *op.cit.* pp.49-54

ORTHODOX CHURCH AND HERITAGE POLICY IN EARLY CEAUȘESCU PERIOD

A study on heritage management and role of World Heritage in post-socialist Romania - 1

Maiko TATEZAKI^{*1}, *Toshikazu HANAZATO*^{*2} and *Riichi MIYAKE*^{*3}

^{*1} Senior Researcher, Japan Cultural Heritage Consultancy, M.Eng.
(Grad. Student, Graduate School of Engineering, Mie University)

^{*2} Prof., Graduate School of Engineering, Mie University, Dr.Eng.

^{*3} Visiting Prof., Tokyo University of Science, Dr.Eng.

Socialist regimes in Eastern Europe carried out harsh repression on religious institutions, but in Romania, the regime was flexible compared with Soviet Union, where Orthodox monasteries were closed by force and torn down. Romanian way of “carrot-and-stick” tactics to the Orthodox Church watered down the resistance of certain clergies and believers while the religious monuments were acknowledged as the tool for the national identity. This paper focuses on the formation of the heritage policy and its implementation by the socialist government vis-à-vis the monastic tradition in Romania.

Three parties should be analysed in terms of the intervention for conservation: State, Orthodox Church and the experts of historical monuments. The official competent body for heritage conservation was formed under the state committees for culture and national planning, but as long as this section was not adequately evaluated by the regime tops, this became nearly an asylum of the experts who continued their identity from the kingdom period and kept liberal attitude by working with local church communities.

The Direcție a Monumentelor Istorice (DMI), started in 1959, played a key role for implementing the restoration works for the Church. This direction kept taking the initiative until the middle of 1970's. According to the budgetary table of their operations during the 1960's, three among 39 counties and Bucharest received the benefit of high ratio of the budget: Suceava in Moldavia (15.7% of national budget for conservation), Brașov in Transylvania (12.7%) and Constanța in Wallachia (10.4%). Since the first is the cradle of Romanian Orthodox Church, the conservation works for such monasteries as Voroneț and Dragomirna were considered crucial. In the second, it was fortification rather than Protestant Church. The third signifies the sites of Roman antiquities. In the monasteries like Voroneț, closed by the secularization policy in the late 19th century, DMI paradoxically accelerated the pace of conservation due to the absence of the church intervention.

In the cases of Suceavița, Doragomirna and Vorneț, the restoration works should be underlined by the contemporary spirit. This was played by an architect Ioana Grigorescu. These three projects occupied more than 70% of the total budget in Suceava County (11% of the national budget). The analysis of her preserved documents reveals that, besides the restoration of the authentic church buildings, nuns' cells, dining halls and even exhibition halls were specially designed with dynamic forms inspired by the Romanian tradition.

In Romania special terminology for urban planning “systematization” had been employed since 1920's but during the socialist period, Marxist connotation with scientific and top-down approach was added so as to form a nation-wide planning conception, which obliged urbanization by migration of rural population. Conservation of historical monuments was so seriously affected by this planning policy that the church communities on comună (village) level suffered enormously. The rehabilitation of historical cities such as Craiova and Constanța were recognized important in the early 1970's responding to the trend of the West, but Vrancea Earthquake of 1977 suspended this movement and squeezed DMI to a much smaller section.

In this sense, the balance among the triangle State – Church – Professional was barely stabilized, despite its sensitiveness, in the early period of Ceaușescu Regime. Input to the conservation policy by timely contact with UNESCO played the role of counter-balance against the pressure of systematization by the leaders of the socialist hierarchy.

(2019年2月10日原稿受理, 2019年10月2日採用決定)